

体感。感動。感謝。NBUのCOC事業をお伝えします。

# coc-nbu.jp

November 2015 Nippon Bunri University, COC MAGAZINE

文部科学省  
地(知)の拠点



日本文理大学COC事業

おおいた、つくりびと

# モンゴルプロジェクト

異文化交流から“多文化共生”の時代へ。  
モンゴルと日本をつなぐ「絆」の物語。



No. 03





# モンゴルプロジェクト

人と人、地域と世界がつながるグローバル社会への一歩。

▲八幡様の総本宮「宇佐神宮」を訪れたモンゴルプロジェクトのメンバー。記念写真でポーズ！

今年7月、モンゴルを訪れたNBU生たち。彼らの目的は、8月に熊本県で開催される国際文化交流事業、グローバルワークキャンプin阿蘇の一環として取り組む「地域文化in大分」のなかま探し。大分県にモンゴルの学生を招き、県内の小学生にモンゴルの文化を紹介したり、日本の文化を彼らに伝える10日間にも及ぶプログラムを企画しました。“地域と世界をつなぐ”をテーマに掲げたモンゴルプロジェクト、そこで彼らが学んだこととは…。

## 雄大なモンゴルの大地からプロジェクトは始まった。

**見** 渡す限りの草原と赤く乾燥した大地。インターネットでは味わうことのできないダイナミックな風景に心が躍る。日



▲モンゴルの専門学校生たちに、日本の「折り紙」を教えるNBU生たち。日本の文化に興味津々。

本から何度も飛行機を乗り換えて、NBU生たちが訪れたのはモンゴルの西部にあるウブス県オランゴム市。オランゴム専門学校で地元の学生たちとの交流イベントが始まった。日本語、モンゴル語はお互いにほとんど理解できない両国の学生たち。片言の英語を交えながらコミュニケーションを図るものの緊張感は隠せない。しかし30分もすると、同世代ならではのフィーリングで笑顔が溢れます。彼らからモンゴル人の暮らしぶりを聞いたり、生活拠点であるゲルや世界遺産のウブス湖を見学するなかで、同じアジアでも、まったく異なる文化が存在することを肌で感じたNBU生たち。今度は大分にやってくるオランゴム専門学校の

なかまに、日本という国を、そこで暮らす自分たちのことをどのように伝えよう…。1ヶ月後の再会へ向けて、モンゴルプロジェクトメンバー全員がアイデアを持ち寄り交流プログラムの作成が始まった。

## 「なかまになる」ことを願い10日間の共同生活がスタート。

**8** 月14日、ついにモンゴルプロジェクトの大分キャンプがスタート。オランゴム市を代表して2名の女子学生が大分にやってきた。歓迎パーティーのときにNBU生からサプライズプレゼントが。それは平仮名で「なかまになる」とプリントされた

揃いの黄色いポロシャツ。お客さんではなく、友達として同じ時間を過ごしたいというメッセージを込めてデザインしたのだった。



▲ロールプレイングゲームのビジュアルをイメージした揃いの「なかまになる」ポロシャツを着て心をひとつに！

翌朝、納豆や卵焼きなど日本ならではの朝食をメンバー全員でつくる。ウィナーは大喜びだが、納豆の匂いに苦笑いを浮かべるモンゴルのふたり。そんな小さな出来事にも国による食文化の違いを垣間みることができる。日本の歴史を感じられる街、臼杵市で、100年以上の歴史を持つ「造り酒屋」の酒蔵や臼杵石仏、お寺を見学。その夜、モンゴルと日本、よく似ているものと、まったく違うものについて、彼らはたくさんを語り合った。



▲大分県を訪れたなら、やっぱり温泉は体験してほしいと、みんなで別府温泉の足湯へ。

## 言葉や考え方の壁をこえて、新しい文化交流の扉を開く。

**今** 回の目的のひとつ、熊本県の阿蘇市で開催されるグローバルワークキャンプにも参加。世界中から10カ国の大学生が集まって、「平和」「国際協力」「貧困問題」などについて、国や文化の違い、考え方や言葉の違いなどを実感しながら話し合い、お互いを理解していく作業は学生たちにとって、驚きと新しい発見の連続だったようだ。この経験から得たものは、さまざまな考え方が存在するが、「どうにかして、世

界中の問題を解決したい!!」という想いは同じだということだった。

再び大分に戻ったモンゴルプロジェクトのメンバーは、メインイベント「日本の小学生との文化交流」の場である香々地小学校へ。全校生徒約70名の小さな小学校で、モンゴルの挨拶や踊りなどを手作りの紙芝居や衣装などを交えて伝えていく。NBU生



▲小学生へ向けてモンゴルの文化や地理を知ってもらうための紙芝居。メンバーによる手書きイラストもGOOD!



▲香々地小学校の皆さんにモンゴル語で「こんにちは」と「ありがとう」をレクチャー中。

たちとモンゴルの留学生が言葉やジェスチャーを交えながら、子どもたちに何かを届けようと汗を流す。「絆」という言葉が本当に良く似合う、ひとつのチームとしての姿がそこにあった。

長いようで短かった10日間の共同生活。空港で見送るNBU生たちに、モンゴルのふたりはこう語りかけた。「家族みたいだね」。互いの国の文化や考え方に深く触れるなかで、ときに戸惑いながらも、共に生きることを意味を見つけようとした若者たち。異文化交流だけで終わらない、多文化共生への夢は、まだ始まったばかりだ。

学生たちの活躍は、NBUのCOC特設サイトをチェック！

[nbu coc](#) [検索](#)

### NEWS



## モンゴル学生と相互の文化体験「モンゴルプロジェクト・大分キャンプ」

NBUキャンパス内で行われた茶道体験を中心に、大分キャンプ中のメンバーの様子がコメントとともに紹介された。

※掲載記事は許諾を受けています。

2015年9月15日 大分合同新聞朝刊掲載



# キラリびと

『おおいた、つくりびと』で活躍する学生、  
教職員、地域の皆さんにインタビュー。

## 03



モンゴルプロジェクト メンバー  
工学部 情報メディア学科2年

梶原 百香

**Q.** モンゴルプロジェクトの  
「大分キャンプ」を振り返って。

**A.** モンゴルの学生は二人とも女性だったので、NBUメンバーの中では私がいちばん一緒にいた時間が長かったと思います。最初は気を使っていましたが、10日間も一緒にいると片言の単語だけでも何が言いたいのかわかるようになりました。改めて海外の人たちとのコミュニケーションについて考えるきっかけになりましたね。直接的に言葉は通じなくてもジェスチャーやスケッチブックを使って絵を描いたり、いろんな方法があることに気づきました。

**Q.** 印象に残った出来事はありましたか？

**A.** キャンプの中盤で、「せっかく日本に来たので着物を着てみたい」というリクエストを聞きました。当初の予定にはなかったのですが、着物は無理でしたが、なんとか浴衣を準備すること

ができました。そのことをすごく喜んでくれたのが本当に嬉しかったですね。準備をしっかりしたつもりでも予定通りに進まないこともたくさんありましたが、今できることを、その場の状況や、相手のニーズに合わせて考え、カタチにしていくことの大切さを学んだ気がします。次はメンバー全員でモンゴルへ行き、今回の活動のモンゴルバージョンをやりたいです。

and more...



### PICK UP! COCプロジェクト

2015.10.10 一束の稲穂の重み

澄み渡った秋空の下、豊後大野市大野町土師地区で、稲刈り・かけ干しの作業を手伝った。以前、ネットで調べたら、茶碗1杯分のご飯は3200粒と書いてあった。たった1粒の種籾から、すくすくと育ち、黄金色に輝く稲穂。作業に入る前に、思わず数えてみたくなる。作業が終了後、「こうして若い人が手伝ってくれるから、私も、もう少し頑張れる気がします」というおじいちゃん言葉が心に響いた。何より便利な機械があったら、高齢者でもできるものだと思います。これが悔やまれる。機械が入れない場所もあるし、もっと大切な「もの」もある。これまで無関

心でいたことも恥ずかしくて口に出せない。

当たり前のようにご飯を食べていた裏には、人手不足だけではなく、もっと深い問題が絡んでいたのだと気づいた。課題・問題のある地域のために何とかせねば、その為にもっと学ばなければどうにもできないという気持ち湧き起こってきた。

よし、今日の出来事を、母さんに伝えてあげよう。

建築学科「プロジェクト1」で秋の地域体験交流活動



まだまだあります！  
大分県内をステージに進行中の  
プロジェクトが盛りだくさん。

- 採穂作業を通して働くことを考える
  - 「川の港まつり」で学んだ「地域で生きるってこと」
  - 夢に向かって羽ばたく滑走路
- etc...

くわしくはNBUのCOC特設サイト **coc-nbu.jp** へ